

慈父のような人

平 岩 外 四

訃報に接した時、一瞬、体の力が抜けてしまいました。テレビ・インタビュで、総理とはどういう人でしたかときかれ、大変やさしい人でした、と私は答えました。質問者にとつて意外であったのかそれ以上の質問はありませんでした。いつでも親身に話をきいてもらえる。総理大臣という公の立場にあつても、大平さんはこんな雰囲気を持つておられました。何より話の中身が豊かでございます。そのうえ機智に溢れたユーモアとジョークは、決して人に権威感を与えません。やさしく相手をいたわる話術は、無口な私を饒舌にさえいたしました。

そんな大平さんが、ある日、私に「自分ではない自分が、堂々と独り歩きするのを見せつけられるほど、嫌なことはありませんね」といわれたことを忘れられません。それはある要件で、分刻みの多忙な総理の日程を、無理をお願いして割いていただいたときのことでございます。「お忙しい時間を頂戴して……」という型通りの私のあいさつに答えるように「本当に多忙だ。ゆっくり話せないのが残念です。私はあんまり忙しいと、ふと私の分身があつたらなあ……」などと途方もない空想をよくするのですが、この頃、神様は大変な分身を私にくれました」と、ジョークをまじえて、当時、大平さんに加えられていた評論について語られたのでございます。

一国の総理ともなれば、あれこれと推測も加えて論評されても、それは宿命というべきかもしれません。大平さんもこの宿命を負わされたわけでございます。しかし、どういうわけで大平さんの豊かな知性や確かな洞察力、そして敬虔で忍耐強いご性格が、あのように曲解できるのでしょうか。素顔の大平さんをよく知っている私には

不思議なことだったのでございます。「自分ではない自分が……」と、大平さん自身がいわれる前から、世間の誤解だらけの大平イメージに、私もイラ立ちをつのらせておりました。

大平さんご自身は、このゆがめられた自分の虚像を、神様が自分に下された試練として受け止めておられたようにございます。そして黙って耐えておられたのですが、私にはそのときのお気持が痛いほど理解できました。

大平さんが亡くなられた現在、私はあらためて「自分ではない自分が……」といわれた言葉を反芻して、これは大変な教訓ではないかと考えております。「自分ではない自分」つまり「真実ではない真実」が、独り歩きしたわけでございます。これは、あながち最高の権力の座だけにまつわるものとはいいきれませぬ。恐らく私のたずさわるエネルギー分野でも、これからその安全保障問題をめぐって、実態と虚構が入り乱れ、日本を含め世界中がゆれ動くものと考えられます。大平さんが東京サミットを主宰されたときも、エネルギーの安全保障は最重の課題でございました。

いまにして思えば、大平さんが私に、「自分ではない自分が……」といわれたその深層心理に「虚像や虚構が独り歩きするのは危険です。手のほどこしよがなくなる前に、当事者である貴方は、エネルギー問題の実態を誠意をもって世間に明らかにする責任があるのですよ」と、警告されていたように思えてくるのでございます。病床にあられても日本のエネルギーの将来を心配しておられたことを承り、身の上を思いでございます。

それにしても、大平さんの総理在任中は、政争に明け暮れて、その知性、その洞察力、その人柄の明るさ、暖かき、誠実さ、立派な持ち味を、政治が充分生かさなかつたことが、残念で残念でたまりませぬ。

お亡くなりになって大平さんの偉大な人間像が一段と輝きを増してまいりました。そして私にとって消えることのない大きな光でございます。私には慈父のような人でありました。

(東京電力社長)